

令和 2 年 6 月 23 日現在

機関番号：32408

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04809

研究課題名(和文) 英語コミュニケーション力と協調的問題解決力を養成するドラマ教育の開発と体系化

研究課題名(英文) English drama workshop methods to promote problem solving abilities

研究代表者

塩沢 泰子 (Shiozawa, Yasuko)

文教大学・国際学部・教授

研究者番号：90265504

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は大学の授業ならびに課外の活動を通して英語コミュニケーション力と協調的問題解決力を養成するドラマ教育の開発と体系化を試みたものである。

とりわけ、毎夏実施された海外を含む異なる4大学に所属する20～30名の学生を対象の、宿泊を伴う約15時間の英語ドラマワークショップ(以後WS)は、自己効力を高め、協調的問題解決力を高めることが示唆された。特に人形劇を導入したWSは高評価を得た。また、指導ならびに使用言語を英語にのみせず、母国語でのやりとりも許可する、"Translanguaging"を試行したところ、学生同士の本音での意見交換が見られ、活動への満足度も上がった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

身体知を育むドラマ手法は日本の教育、特に大学教育ではあまり認知されていない。本研究は英語コミュニケーション力と協調的問題解決力の養成にインプロ(即興活動)やドラマ創作・発表といった一連のドラマ手法(DIE:Drama in Education)が有効であることを示唆した。さらに人形制作を含む人形劇の導入により、芸術活動と語学教育の融合の手法や効果の可能性を示した。また、ワークショップにおける母国語使用を許可することにより、活動が深まり、協働がよりスムーズになることが観察され、語学教育で注目されるTranslanguaging(複言語使用)の意義が確認された。

研究成果の概要(英文)：The authors conducted a 3-day English drama workshop including 20 - 30 college students to raise communication skills and leadership skills every summer. The results suggested the effects of drama workshops: improvement of self efficacy and problem-solving abilities. Above all, the workshop 2019 involving puppet-making and performance using it was a great success. Puppet-making allowed the participants to work together naturally and alleviated psychological pressures. It also gave them opportunity to exercise their creativity. Another interesting point was that the puppet artist used Japanese; however, it promoted students' interaction in Japanese, English and Chinese, resulting in close communication in multi-languages. The participants favored this "translanguaging" workshop.

研究分野：英語教授法

キーワード：英語教育 ドラマ手法 ワークショップ 協調的問題解決力 複言語使用 芸術活動 リーダーシップ

1. 研究開始当初の背景

【本研究の社会的背景】ITの飛躍的な進歩もあいまって、ヒト・モノ・金・情報が国境を越えて行き交い、今や経済活動は国際共通語である英語コミュニケーション抜きでは機能せず、英語力の向上は日本の将来にとり喫緊の課題となっている。文科省は、英語教育においては基本的な知識・技能に加え、それらを活用して主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成が重要課題としている(文科省の提言, 2014)。一方、人類を取り巻く社会問題や環境問題も複雑化し、国境を越えている。未知の問題を抱えた昨今の社会では、基礎的な学力や知識に加え、自ら問題を発見し、考え方や文化の異なる人々と対話し、折り合いをつけて価値をつくり上げていく力、言い換えれば「協調的問題解決力」(ベネッセ教育研究開発センター, 2015)が必須である。これは世界的なIT企業の支援により2009年に定義された「21世紀型スキル」(ACT21S)や、経済協力開発機構(OECD)が提言する「主要能力(Key Competency)」と軌を一にするもので、国内では経産省(2006)が定義した「社会人基礎力」: 前に踏み出す力 考え抜く力 チームで働く力、と密接な関係がある。これらの提言はいずれも、多様な社会の中で問題を発見し、対話を通して合意形成・問題解決する能力の必要性を提唱している。

【国内外の先行研究・学術的背景と本研究の位置づけ】諸外国では、ドラマ教育は20世紀初頭から積極的に導入され、米国では全人的教育を推進する手法として(Herts, 1911)、英国では伝統的な座学から児童中心主義教育への移行とともにドラマ教育が発展・定着した(Bennett, 2005)。ドイツでは、演劇がシュタイナー教育の中心をなし、劇作家・演出家のプレヒトによる教育劇や、その影響を受けたブラジルのポアールがドラマを市民教育に使った。アジアでもフィリピン教育演劇協会(PETA)がドラマを社会変革や平和教育の牽引力にしている。このように諸外国では、母語によるドラマは鑑賞する対象としてだけでなく、教育や啓発の手段として活用されている(塩沢, 2013)。日本では竹内敏晴(1989)が、芝居の練習から上演に至る生徒の変容を元にドラマの効果を主唱した。近年、小林ら(2010)により教科教育にもドラマ手法が活用されているが、これらは、各教科を母語で教えるものであり、外国語教育へのドラマの活用は十分ではない。英語を第二言語として教えるESLでは、ドラマ手法はMaleyら(2005)が、ウォームアップ活動、即興劇、台本を使ったドラマを紹介しているが、英語を外国語として教えるEFL環境下の日本では、ドラマ手法は断片的に使われている程度である。一方、研究代表者らは、90年代から、大学生対象に朗読、群読、創作劇など、ドラマ手法の導入による実践と理論研究を行い、その教育効果の可能性を指摘してきた(「オーラル・コミュニケーションの新しい地平」塩沢ら, 2013)。本研究は、この蓄積と基盤研究(C)(H26~H28年度)「ドラマを活用したコミュニケーション力と『生きる力』を育む英語教育」で得た知見を土台にして、英語教育におけるドラマの活用を、より飛躍的に具体化、深化させるものである。

2. 研究の目的

【研究代表者らによるこれまでの研究成果と本研究で明らかにすること】研究代表者らは、従来からの英語授業へのドラマ手法導入に加え、基盤研究(C)(H26~H28年度)の一環で、毎夏、大学生対象の約15時間の英語ドラマワークショップを実施した。これは、種々の即興ドラマ活動に始まり、朗読、小唄、そしてグループによる英語寸劇の創作、発表を主活動とするもので、複数大学より延べ130名が参加した。指導には研究代表者ら、ならびにプロの役者があたり、参加者は非言語ゲーム活動から英語を使って身近な問題から社会問題まで相手と交渉する五感を活用したドラマ活動に取り組んだ。質問紙による事前・事後調査により、参加者は実際に英語と非言語表現を使って交渉し合って創作活動したことにより、「社会人基礎力」で定義された「前に踏み出す力」や「チームで働く力」が特に高まったと認識していることが統計的に確認された(Shiozawa, Saito, & Kusanagi, 2015, Shiozawa & Kusanagi, 2016)。一方、このワークショップでは短期間のため、参加者は英語力の向上は認知できなかった。他方、同科研究では、外国語学習者対象の英語劇団(White Horse Theatre)との連携により、英語劇上演と事前ドラマ活動の実施、劇団視察の機会を得た。その結果、学習言語による本物の演劇鑑賞により、英語母語話者による「意味ある場面での生きた言語使用」により、聴衆が自然に言語を獲得すること、そして授業では得がたい、文脈を伴ったやりとりが自然に右脳と左脳を結びつける可能性が示唆された(塩沢、齋藤、草薙, 2016)。さらに、ライブでは役者と聴衆のコミュニケーションに加え、同時に鑑賞している他の聴衆(学習者)に喜び・悲しみなどが伝播し、学習者同士の感動の共有を促すことが劇鑑賞の顕著な利点であることが確認された。これはYouTube, DVDなどのメディアで置き換えることはできない。そして感動は学習意欲を大いに高める(塩沢、齋藤、草薙, 2016)。また、観劇の前後にドラマ手法のワークショップを実施することにより、言語獲得や内容理解が一層深まり、学習者の意識を高めることも観察された。また、劇団視察により、俳優養成と上演に向けた稽古のプロセスと俳優と監督の関係性に教育との著しい類似点が見出された。これらの成果は作成したDVDや学会報告等で社会に還元した。しかし、ドラマ手法ならびにその効果についての量的・質的分析がまだ十分ではなく、理論化・体系化するにはさらなる教育実践と実証研究が必要である。特に、効果が示唆されたドラマ手法と劇鑑賞の両者を組み合わせた場合の相乗効果についての研究は日本では皆無である。本研究では、ドラマ手法

を用いた実践と劇鑑賞を組み合わせた教育実験をさらに推進し、研究代表者らの 学生を対象として 1 年を通して活動記録、インタビュー、録画、質問紙調査、英語力のデータを 採取し、3 年間にわたって質的・量的データを蓄積・解析し、効果的な手法や組み合わせとその 背景など、ドラマ教育の手法と効果を実証的に検証する。そして得られた知見や成果を、教員免 許状更新講習、学会、研究会でワークショップと口頭発表を行い、発信する。特に、ドラマ手法 と観劇の相乗効果に重点を置き、最終的には、英語コミュニケーション力と協調的問題解決力を 養うドラマ教育の理論と実践を体系化し、書籍として出版し日本の英語教育を充実させる。

3. 研究の方法

文献調査：書籍、専門雑誌、電子ジャーナル等から先行研究を収集し調査する。ドラマ教育、演劇手法などをキーワードに、その手法と理論を蓄積する。英語ドラマワークショップ実施：2 泊 3 日の合宿形式で大学生対象に約 15 時間のワークショップを実施し、ドラマ手法の開発と量的・質的データ採取を行う。研究代表者らがファシリテーターとなる他、プロの役者らの協力を得る。授業でのドラマ手法実践：研究代表者らの授業「専門ゼミナール」、「英語オーラル・コミュニケーション論」、「英語とメディア」(塩沢)、「English Language Teaching」、「English for Specific Purpose」、「文化演習」(齋藤)、「Reading」(草薙)でドラマ手法を実施し、毎回フィードバックを得る。授業によっては主活動として取り入れる。劇発表・鑑賞と事前・事後ワークショップ：研究代表者らが指導する学生を含め、複数大学の学生が一同に会しての英語劇発表会(12 月に実施。100 名以上参加)を通して、練習・発表・鑑賞とワークショップによる学生の変容に関して、量的・質的データを得る。ドラマ手法の普及：教員免許状更新講習会で、ドラマ手法を実演し、冊子を配布して紹介する(塩沢、齋藤)。ドラマ手法を参加者の授業で実施してもらい、フィードバックを得る。

4. 研究成果

海外を含む 4 つの異なる大学に所属する 20~30 名の学生を対象に宿泊を伴う約 9 時間の英語ドラマワークショップを毎年開催し、その手法と効果を研究した。毎回、テーマや手法を変えて実施したが、即興活動や小グループでドラマを創作して発表しあうドラマワークショップは自己効力を高め、協調的問題解決力を高めることが示唆された。

特に人形劇を導入したワークショップは高評価を得た。また、指導ならびに使用言語を英語にのみせず、母国語でのやりとりも許可する"Translanguaging"を試行したところ、学生同士の意見交換がより盛んになり、内容も深まり、活動への満足度も高かった。

上記のワークショップに加え、研究者らを含む複数大学が一堂に会して開催する英語パフォーマンスフェスティバルを毎年 1 2 月に実施し、その指導課程と成果を報告書にまとめている。またフェスティバルは録画され、オーラル・コミュニケーション力に関する授業やプロジェクトの指導に生かされている。

ドラマ手法は上記のような特別なイベントだけでなく、前記の英語関係ならびに異文化理解に関する授業においても活用し、その実践や成果は学会や研究会で発表した。主なものは下記の通りである。

加えて、筆者らはドラマ手法のさらなる研究のため、国内外の教育者や研究者のためのワークショップや研修会に出席した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 塩沢泰子	4. 巻 22
2. 論文標題 Ice Break（文教大学の作品の創作・上演の背景）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The 22nd JACET Oral Communication Festival報告書	6. 最初と最後の頁 9-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 草薙優加	4. 巻 22
2. 論文標題 鶴見大学 Human relationships and diversity	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The 22nd JACET Oral Communication Festival報告書	6. 最初と最後の頁 20-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 草薙優加、内藤真理子	4. 巻 17
2. 論文標題 英語の群読	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 第17回日本群読教育の会 全国研究集会大会研究紀要	6. 最初と最後の頁 78-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yasuko Shiozawa & Eucharia Donnery	4. 巻 11-2
2. 論文標題 Overcoming Shyness: Promoting Leadership and Communication through English Drama Camp in Japan	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 SCENARIO Journal	6. 最初と最後の頁 15-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 塩沢泰子	4. 巻 23
2. 論文標題 "After Cinderella Left" (文教大学の作品の創作と上演の背景説明)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The 23rd JACET Oral Communication Festival報告書	6. 最初と最後の頁 4-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩沢泰子	4. 巻 24
2. 論文標題 "Billy" (文教大学の作品の創作と上演の背景説明)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The 24th JACET Oral Communication Festival報告書	6. 最初と最後の頁 33-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計9件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 Yasuko Shiozawa & Eucharia Donnery
2. 発表標題 Building bridges between people
3. 学会等名 IDIERI 9th conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松本真治、草薙優加、鈴木実佳、吉本和弘
2. 発表標題 文学作品を使う英語教育が目指す < 主体的・対話的で深い学びとは >
3. 学会等名 日本英文学会第90回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 塩沢泰子、佐伯林規江、橘野実子
2. 発表標題 JACET Oral Communication Study Group
3. 学会等名 JAAL in JACET (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 齋藤 安以子
2. 発表標題 学習言語による水準の高いアウトプットをめざした演習授業 -学生が互いに聞きたくなるBibliobattle in Englishができるまで
3. 学会等名 大学英語教育学会 第57回国際大会 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 齋藤 安以子
2. 発表標題 ドキュメンタリーの日本語字幕作成を通して学ぶ複数の視点と文化翻訳
3. 学会等名 映像メディア英語教育学会 (ATEM) 第16回西日本支部大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yasuko Shiozawa & Eucharia Donnery
2. 発表標題 Building bridges between people
3. 学会等名 IDIERI 9th conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 齋藤 安以子
2. 発表標題 学習者が内容あるアウトプットを英語で行えるようにするための教授言語選択 EMI or Not: Pursuing Meaningful Output in the Target Language by Learners
3. 学会等名 JACET関西支部秋季大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Shiozawa, Y., Kusanagi, Y., & Saito, A.
2. 発表標題 Integrating DIE with TIE for understanding social issues
3. 学会等名 JALT Speech, Drama, & Debate SIG, Performance in Education: Research & Practice Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kusanagi, Y., Shiozawa, Y., & Donnelly, E.
2. 発表標題 Looking into Learners' Minds through Interviews: Multilingual Puppeteering
3. 学会等名 The 8th IAPL Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 塩沢泰子、草薙優加、齋藤安以子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 文教大学出版事務局	5. 総ページ数 100
3. 書名 戯曲で学ぶ対話力	

1. 著者名 草薙優加	4. 発行年 2017年
2. 出版社 高文研	5. 総ページ数 123
3. 書名 新いつでも群読	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	草薙 優加 (Kusanagi Yuka) (50350335)	鶴見大学・文学部・教授 (32710)	
研究分担者	齋藤 安以子 (Saito Aiko) (60288967)	摂南大学・外国語学部・教授 (34428)	